バンコク北部で見たアジアコガタウ *Phalacrocorax niger* の生息状況

Notes on brief observations of the Little Cormorant *Phalacrocorax niger* in northern parts of Bangkok, Thailand.

福田道雄(Michio Fukuda)

アジアコガタウはインド南部、スリランカからインドシナ半島、インドネシアまでのアジア南部に分布する全長52~56cmの小型のウである(Harrison 1983, Lekagul and Round 1991)。このウについての詳しい習性を記載したものは、みあたらなかった。さらに日本ではほとんど紹介されることがない。

筆者は、1992年1月15~16日に、タイのバンコク北部で採食および休息場所のいくつかを見ることが出来、またスキハシコウのThasa-Det バードサンクチュアリ内にあったコロニーを観察する機会を得た。短時間で断片的な観察であったが、若干の考察を加えながら紹介してみたい。

採食および休息状況

まず、幹線道路沿いの灌漑用の水路で、杭、太い水草の茎や岸にとまっていたり、水面に浮かんでいた個体を見た(図1)。また、この水路では地元の人達が集まって、網を張り魚を所々で採っていた。したがって、魚の生息数も少なくないようだった。漁をしている人達は、ほとんど船は使わず、水路の中に立って作業をしていたので、水路はさほど深くなかった。水路は、所々で横切った道路の下に埋設された大きな土管でつながるようになっていたが、ちょうど観察時が乾期であったため、水の流れが各所で途切れていた。そして魚は、漁が行われていた水量の多い部分に集まっていたとみられる。アジアコガタウは水量の多く残った部分の人気のない所で見られた。

次いで、Buang Chawagサンクチュアリ内の湖(直径数km以上)でも、やはり杭や水草の茎で休んでいた、潜って採食活動をしていた個体を見た。この湖ではスイレン類などの水草の茂った、比較的浅いと思われる場所付近でしか見られなかった。この湖自体が非常に広い範囲にわたって水草類に覆われていたこともあって、少なくともこの時期に活発に漁をしているような様子はなかった。

また、コロニー近くには流れのある小川またはクリークが幾つもあり、それに沿った道の幾つかを車で走ったが、一度もアジアコガタウの姿を見ることはなかった。以上のようなことから、観察した近辺では主として比較的浅い、ほとんど流れの静止した水辺を採食活動などに利用するものとみられた。さらに、この時期に関する限り、漁業と直接競合しているようにはみられなかった。

本種は典型的な内陸淡水型のウだが、Lekagul and Round (1991)やSmythies (1986)には海岸でも採食すると記載されている。今回の場合、コロニー周辺を除き23羽を目撃したが、すべてが単独であった(観察地や観察時間との関連もある)。単独か小群で採食することが多く、多数が集まることは少なく、単独でいることが多いという記載(Aagaard 1930, Smythies 1986)や、大群も形成するという文献(Ali and Ripley 1983, Henry 1971)があり、生息地の条件によって状況は変化するようであった。一方、Ail(1969)は群を形成して、時々ペリカン類のように魚を追いついて漁をすることもあ

図1. 道路沿いの水路の中の杭にとまったアジアコガタウ。

Fig.1 The Little Cormorant *Phalacrocorax niger* perched on a stake in a canal.

ると述べている。しかしながら、ウ類は採食場の状態によって、さまざまなやり方で採食活動を行うことが知られている。筆者が観察しているカワウ *Phalacrocorax carbo* の場合も、群で採食していても基本的には個々のカワウが独自の採食行動をとっていて、魚が多くてそれが一方向に向かって移動していく場合には、いかにも追い詰めていくように見える。そこで、その他の文献には上記のような記載がないことから、このような光景が見られるのは魚の密度の大きい場合で、そのような状況が生じる条件に合った地形の場所に限られる可能性が高いのではないと思われる。

繁殖状況

バンコクから北西約40kmに位置するTasa-Detバードサンクチュアリ内でアジアコガタウがスキハシコウやコサギ、ゴイサギなどのサギ類とともに混合コロニーを形成していた(図2)。1月15日、16時20分から17時10分まで、ちょうど就鳩直前の状況を観察した。コロニー内は樹木が茂っていて正確なカウントは困難であったが、成鳥の生息数は1,000羽たらずと推定出来た。多くの文献ではサギ類と混合コロニーを形成するとされているが、Smythies(1986)はミャンマーでアジアヘビウとも、Henry(1971)はスリランカでコウノトリ類やペリカン類とも混合コロニーを造ることを、さらにAli and Ripley(1983)は単独でもコロニーを造ることを記載している。また、多くの場合は水辺近くの水辺内の樹木を営巣場所として利用し、Smythies(1986)ではヨシ原、竹林、ヤシも利用すると述べている。

翌1月16日は9時から10時15分までの午前のまだ盛んに雛が餌ねだりをしている時間帯に観察出来た。このコロニーの観察時の繁殖ステージは育雛後期となっていて、すでに巣は一巢も確認出来なかった。まだ飛べない雛、あるいは巣立ちまもない幼鳥は同腹ごとに枝にかたまるとまっていて、親鳥が戻って来ると枝づたいに寄って行き餌ねだりを繰り返して、給餌されていた。そして親鳥は給餌後、

別な枝に移るか、飛び去っていた。なお、雛の羽数のカウントはサンクチュアリ内の3階建ての観察塔から行い、営巣樹が入り組んでいたため推定であるが、250~300羽が残存しているとみられた。

アジアコガタウの産卵数は、Ali and Ripley(1983)とHenry(1971)では3~5個、Ali(1969)では4~5個とされている。しかしながら、一つの枝に集まっていて同腹と判別出来た雛(幼鳥)数は多くが2羽、ついで小数が1羽、ごくわずかが3羽であった。Ali and Ripley(1983)らは、巣が小さ過ぎて雛が大きくなると収容できるだけのスペースがなくなると述べている。観察時、枝に留まっている雛(幼鳥)達の体の大きさは親鳥とほとんど変わらない大きさになっていたのも、巣はすでに雛の活動によって崩壊したものであることは容易に想像できた。本種の造巣能力が育雛数と、もともとバランスがとれていなくて、早期の巣の消失に合わせた、他種のウ類と異なった営巣習性を持っているか、育雛後期には異なる育雛方法が行われている可能性が高いと考えられる。

まず、おそらく親鳥は、始終餌ねだりをする大きくなった雛達から離れた枝にとまり過ごす場合が多いと思われるので、コロニー内のなわばり意識が他種ほど強くないものと考えられる。あるいは隣の巣との間隔が大きく、あまり密集した造巣を行わないのかもしれない。また、産卵数に比べ、育雛数が少なかったことは、親鳥の給餌能力(食糧運搬能力)の限度によるばかりでなく、誤って木から落下する雛も少なくないためかもしれない。そこで、雛の間で早く育ったものがますます生き残る割合が高くなるものと思われる。カワウの場合、非同時孵化のため当初は孵化順によって成長の差がみられるが、育雛初期の間は給餌回数の少なかった成長の遅い雛も、親鳥からの給餌回数の逆転現象によって巣立ちまでにはその体格差がほとんど解消されてしまう(福田 未発表)。しかし、巣の消失によって一本の枝上で暮らしていたアジアコガタウについては、おそらく育雛の後半期から親鳥への餌ねだりのために枝づたいをするだけの体力が必要なことは明らかで、また親鳥も不安定な枝上では

図2. スキハシコウのコロニー内に営巣したアジアコガタウ。

Fig.2 The colony of Little Cormorants in company with Asian Openbills, Egrets and Herons.

最も近くにきた雛にしか給餌出来ないだろう。さらに、雛自身が直接外部からの気象の変化や各種の刺激に対処しなければならぬので、成長が早く進んだものがより有利な条件の場合が多く、カワウでみられたような状況は起こり難く、他種よりも雛間の淘汰が強く働いている可能性があると考えられた。

なお、親鳥の休息時の翼広げ(Wing-spreading)、雛への給餌(Feeding)、雛の餌ねだり(Food-begging)時の頭振り(Head-wagging)と咽膨らまし(Kink-throating)などの観察出来た主要な行動は全くカワウと同一のものであった。

Summary

I observed the feeding, resting and breeding behaviors of the Little Cormorant in northern Bangkok between 15 and 16 January, 1992. The birds were breeding in the Tasa-Det Bird Sanctuary.

In all cases, the Cormorants fed and rested alone in comparatively shallow and still parts of canals and lakes. The colony was nearing the end of the rearing period and I was unable to locate the nests, perhaps because they had fallen apart by that late stage. Two or three hundred chicks perched on branches begging and being fed by their parents. Almost all pairs reared only two chicks.

引用文献

- Aagaard, C. J., 1930. The Common Birds of Bangkok. Copenhagen, CHR. Backhausen.
- Ali, S., 1969. Birds of Kerala. London, Oxford University Press.
- Ali, S. and S. D. Ripley, 1983. Handbook of the Birds of India and Pakistan. Oxford & New York, Oxford University Press.
- Harrison, P., 1983. Seabirds. London & Sydney, Croom Helm.
- Henry, G. M., 1971. A Guide to the Birds of Ceylon. New York & Bombay, Oxford University Press.
- Lekagul, B. and P. D. Round, 1991. A Guide to the Birds of Thailand. Bangkok, Saha Karn Bhaet Co., Ltd.
- Smythies, B.E., 1986. The Birds of Burma. Hants, Nimrod Press Ltd.

〒110 東京都台東区上野公園9-83 上野動物園飼育課

Ueno Zoological Gardens, Ueno Park, Taito-ku, Tokyo 110